

Essay

Sapiarc.com

2012年3月10日(2012-02)

大震災から一年

2011年3月11日に起きた東日本大震災から早くも1年になる。「復興」とか「絆」という言葉が合言葉のように飛びかっているが、いささか空回り気味だ。復興は簡単には進まないようだが、それは不思議ではない。地震そのものの規模が大きかっただけでなく、巨大津波の被害が広範囲に及び、深刻な原発事故も起きたのだ。17年前の阪神淡路大震災の被害も大きかったが、今回の震災はそれを遥かに超える複合災害だった。

阪神淡路大震災の復興に対しては、国から約10兆円がいろいろな形で支出されたと聞く。今回東北の復興に30兆円以上が必要と言われているようだが、原発事故に関する費用は長期にわたって支出しなければならないだろうから、必要な額を正確に見積もることは難しいだろう。

阪神淡路大震災が起きたときには、日本の財政は今のようにはなっていない。ところが今の財政状況はひどいものだ。政治の世界では何年も混乱が続いており、いつになればまともな形になるか予想がつかない。経済界の活力にもかげりが見える。増税は避けられないのに、平均収入は増えそうもなく、減ることもあり得る。実際、国家公務員の給与は、7.8%という高率で削減されることとなった。しかも、新規採用者数を大幅に減らそうとしている。まさに前代未聞のことだ。人口の減少傾向も続いている。将来への明るい展望のある

分野もないわけではないが、全体として見通しは不透明だ。

パッとしない現在の日本で生きていくための拠りどころとなるものはあるのだろうか？ 確たるものがあるとは思えないのだが、ここで、今とは大きく状況が異なっていた高度経済成長期にはどうだったのかを振り返ってみることは意味があるだろう。あの時代の人々には確たる拠りどころがあったのだろうか？ 私には、そうは思えないのだ。終戦直後の劣悪な生活が確実に改善しており、世の中がその方向に動いているという感覚はあったが、個人としての生活に対する精神的支柱がしっかりとあったとは思えない。何となく世の中の動きについて行ったというのが本当のところではなかったか。

要するに、自分の拠りどころはこれだとハッキリ言える人は、昔も多くはなかったし、これからもそうだろう。そういうものだと思う。私自身もそういう人間のひとりなのだが、最近よく思い出すのは、正岡子規が「病床六尺」に書いている言葉だ。ワイド版岩波文庫の「二十一」段にあるその言葉を旧かな使いのまま引用する。

『余は今まで禅宗のいはゆる悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬることかと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。』

30年ほど前のことと思うが、私はこのくだりを読んで、ハッとした。よく知られているくだりなのだが、そのときは、そうなのだというとも知らなかった。

子規の一生は、わずかに34年と3箇月ほどの短いものだった。「病床六尺」は死の半年ほど前に書かれたものだ。当時は、人生五十年が当たり前の時代だったから、人は皆老成していたのだろうが、この文章は33歳の人を書いたものとはとても思えない。あるいは、その若さで死と向き合っていたからこそ書けたのだろうか。

脊髄カリエスという当時は不治の病に侵され、苦痛のために自殺を考えたこともあったそうだが、上記の文章の境地に達してからは、むしろ楽天的に詩歌の改革運動に邁進した。病気のために、子規は強い精神力をもった人になったのだ。

私は、子規居士の真似をして、正義と不正、善と悪、真実と虚偽、美と醜、巨富と貧困、友好と敵対、安全と危険など、対立するものが複雑に絡み合っていて、しかも急速に変化する現代を平気で生きようと思っている。（おわり）